筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十四回）

遣新羅使と万葉集～その９～

～引津・可也（かや）の山～

・万葉集巻十五には天平八年（西暦七三六年）阿部継麻呂を大使とする遣新羅使人の一行は六月に難波を出航し、瀬戸内海を西に順調に航海していたようであるが、筑紫（九州）真近かの、佐波の海（周防灘・山口県防府市沖合い）で暴風のため遭難し、筑紫（九州）の東部に位置する分間の浦（今の大分県中津市）に漂着した。（本シリーズ第五十一回）

・その後、万葉集の歌の内容から七夕、前後の頃に博多湾岸の筑紫館（つくしのむろつみ）（現・福岡市中央区城内）に着き船団を立て直して筑紫館に近い福岡（博多）湾に面した「荒津（現・福岡市中央区）」を船出したが間もなく日本海の一部で福岡県北西部に広がる海域である玄界灘に突き出た糸島半島沿岸を通過中に海が荒れていたため出港地の「荒津」から約２０ｋｍ離れた糸島半島東側突端に近い「韓亭（からとまり）（現・福岡市西区唐泊）」にて三日間停泊して海が鎮まるのを待ったことが万葉集に詠われている。（本シリーズ第五十三回）

・その後、糸島半島に沿って西へと巡り「韓亭」からさらに約１０ｋｍ離れた引津亭（ひきつのとまり）（引津は現・糸島市志摩町引津湾の説がある。）に停泊した。

万葉集にはその時に遣新羅使が詠った「引津の亭に船泊（ふねは）てて作る歌七首」が載る。その内の三首に可也山麓で男鹿が鳴く次の歌がある。

1）草枕　旅を苦しみ　恋ひ居れば　可也の山辺に　さ男鹿鳴くも

巻十五―三六七四　作者・壬生宇太麻呂

（解説）旅の苦しさに、故郷を恋しく思っていると、可也の山辺に男鹿が鳴く。（それを聞くと恋しさがまさる。）

2）妹を思ひ　眠の寝らえぬに　秋の野に　さ男鹿鳴きつ　妻思ひかねて

巻十五―三六七八　作者・遣新羅使

（解説）君を思って、寝られずにいると、秋の野に男鹿が鳴いた。妻を思う心に堪えかねて。

3）夜を長み（なが）　眼の寝らえぬ（い　ね）
に　あしひきの　山彦響め（やまびこととよ）
さ男鹿鳴くも（をしか）　巻十五―三六八〇　遣新羅使

（解説）秋の夜が長いので寝られずにいる折から、加也山の山麓に山彦を響かせて男鹿が鳴くことだ。

・この三首が詠われた「引津の亭」は、糸島半島の西側、もと志摩郡（現・福岡県糸島市志摩町）の停泊地で、その位置は確定されていないが、「おそらく玄界灘から避難するのに最初の良湾である「引津湾（引津浦）の湾岸であろうとの説がある。（万葉集地名歌総覧）

1）の歌に詠われている「可也の山」は引津浦（引津湾）の東方に見える糸島半島のシンボル可也山（高さ三六五メートル）のことである。その秀麗な山容から筑紫富士・糸島富士・小富士とも呼ばれている。

・清原和義著「遣新羅使と筑紫」には可也の山は特にその南及び西斜面は裾野の傾斜も緩やかで、奈良東郊の春日山や高円山に似た所がある。その山の裾野で雄鹿が妻を呼び求めて鳴くところに、一層妻恋いの思いをかきたて一行は望郷の思いを強くしたに違いないと記される。

（参考文献）日本古典文学大系「万葉集」、「万葉集地名歌総覧」・清原和義著「遣新羅使と筑紫」他

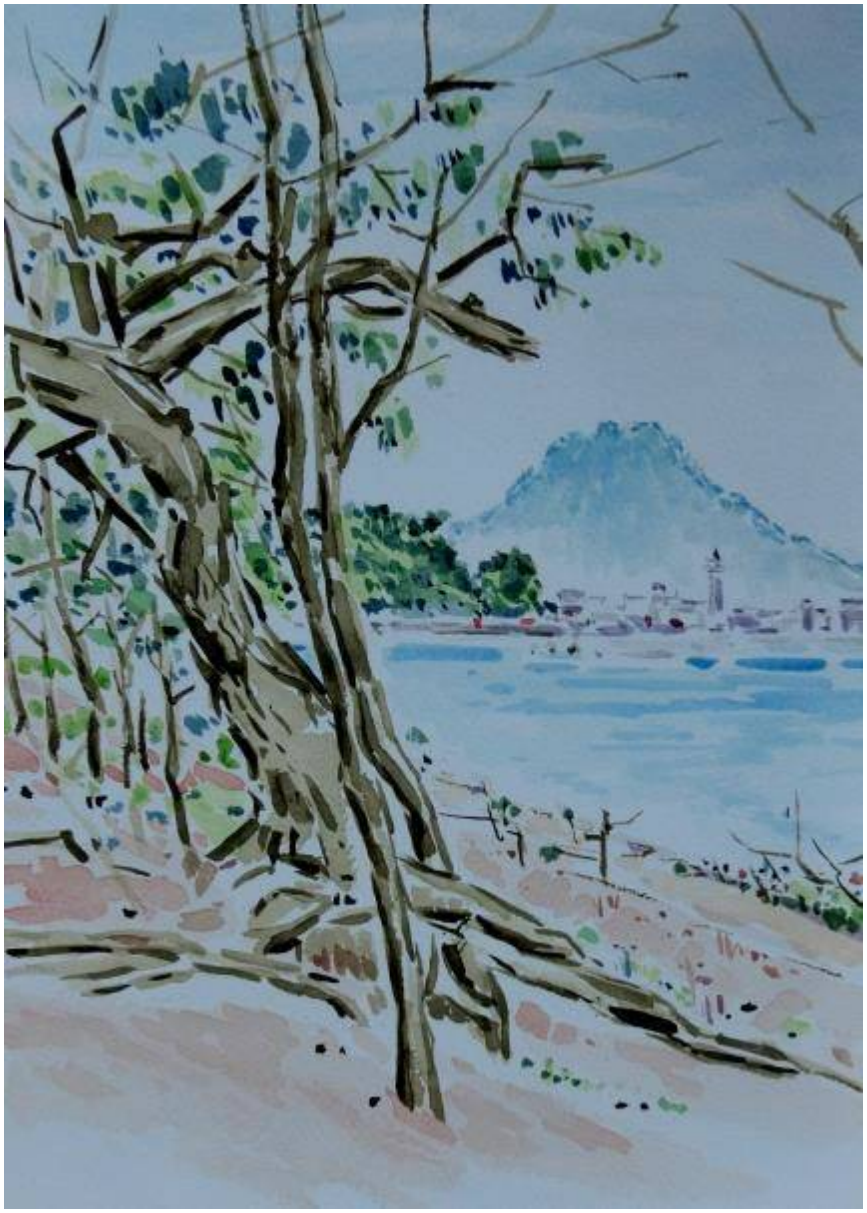
《写生地１》

糸島市志摩町船越の漁村から糸島半島の北端に最も近い半島の西の港・引津湾と東方に見える可也山風景を描く。（杏　花）

《写生地２》

可也山は糸島半島西部に位置し半島の平野部ほぼ全域と福岡湾に面する福岡市内からも西方に秀麗な山容を望むことが出来る。福岡市西区姪浜海岸から福岡（博多）湾と背景に加也山を描く。（杏　花）

「引津湾・可也山位置図」



（写生地２）　福岡市西区姪浜・生の松原から西方を望む。